

# 会報

三二号 二〇二〇年九月二十七日  
編集・発行人 支部長 佐藤秀明

## 【巻頭言】

「文学国語」のために

中田睦美

旧聞に属しますが、「朝日新聞」(二〇一六・四・七)紙上の「オピニオン&フォーラム」欄に「耕論 文系で学ぶ君たちへ」というタイトルで、最果タヒ、鷺田清一、ロバート・キャンベル三氏の随想が掲載されていました。この御時世、文系学部で学ぶことに何となく肩身の狭い思いを抱いているだろう若者たちを励ますための啓蒙的文章だといえ、確かにそうなのですが、それだけでは済まないような気がしました。鷺田氏の一文には次のような一節がありました。「文と理は対立する学問ではないんですね。一つのことを両面から探るのが学問なのです。もつと言えば、言葉の意味でも対立しません。文は織物の「文(あや)」、理は石の「肌理(きめ)」、どっちも模様、ないしは筋のこと。見極めようとするものは同じです。だから、大学ではみな文を学んだと思ってください。ちな

みに、文化の文に対立するのは「武」です。／そう考えると、危機にあるのは文系学部ではなくて『文化』であり『文』です」と。

これに倣っていえば「危機にあるのは『文化』や『文』ばかりでなく、『文学』でもあり『文学研究』でもある」と言えるでしょう。

その顕著な現れは、雑誌「國文学」(學燈社)や「解釈と鑑賞」(至文堂)の廃刊および「文学」(岩波書店)の休刊だったので、それらの雑誌の恩恵に浴してきた関連学会から大きな声は上がらず、黙認してしまいました。特に前者二誌は、かつて高校や中学

の国語科教員が定期購読で下支えし、学会会員の掲載論文が教員たちの参照項となっていました。が、徐々に双方の乖離が大きくなり、定期購読が減少した結果、両誌の地盤は崩壊しました。つまり、国語の教育現場と研究業界の溝は大きく広がり、両者の距離は遠

くなったのです。そして、次にやってきたのが、国語教育の現場から文学の学びが追い出されるという事態です。教育現場から文学の学びが奪われると、「文学」や「文学研究」の地盤も失われますが、この深刻な事態に従来と同じく黙っていてよいのでしょうか。

今あらためて、「文(学)」が「学部」として自立・存立している意味を問わなければならないと考えます。かつての哲「学科」が専攻等に戦線縮小し、今や絶滅危惧種のように数えるほどしか命脈を保っていない事態を

思うと、各大学の文「学部」にどのような近未来が訪れるのでしょうか。かりに独立した「学部」が失われても、「学科」に後退して細々と学問を続けられればよいという発想にも危うさを覚えます。「学部」として存立している意味を我々は今一度再考しなければならぬのではないのでしょうか。多くの若者が、もう「哲学」という学びがあることさえ意識できないのと同様、今、「文学部」は、かつての哲学の運命と同様の道を辿るのではないかと危惧します。

話を戻しましょう。

深刻な事態とは、令和四年から使用実施される高校国語の教科書問題です。

平成二六年一二月の中教審の諮問に始まり、平成二八年一二月の答申をうけ、平成三〇年三月に改訂された高等学校学習指導要領からは、高校二年生および三年生の国語教科書の名称が大きく変わります。従来の「現代文A・B」(文学教材と評論教材の並置)

「古典A・B」「国語表現」から、(平成三〇年度の周知徹底・平成三一年度より令和三年度の移行期間を経て)「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」へと学習内容が細分化されます。問題は、その四種の教科書のすべてが四単位の学習(一週間に四時間の学習時間を確保)とされたことです。国語は、二年生・三年生の二年間で計八単位修得となっているので、選択される教科書は二年間で

必然的に二種類のみを選択するということになります。近年の受験国語の入試問題を考えれば、大学進学を主とする教育現場が採用する教科書は、当然ながら「論理国語」と「古典探究」に傾くであろうと想像できます。つまり、「文学国語」が最も等閑にふされる可能性が大であることが容易に推測できるのです。この新たな四種の教科書を今から変更することは不可能なので、その改善策として四種の選択科目を二単位扱いとすれば、すべてがバランス良く学べる形となり、「文学国語」にも一筋の光明が残ります。

「危機にあるのは」「文化」であり「文」である」とともに『文学』や『文学研究』でもある「状況において、この足元の問題について私たちは声をあげるべきではないでしょうか。私たちの存在理由のためにも、そして、「文学を(大学で)学ぶ/学びたい」と堂々と言える未来の子どもたちを失ってしまわないためにも。

■新刊紹介  
京都と文学研究会編、須藤圭責任編集  
『ものがたりたちの京都 京都文学入門』

文学に描かれた「都市空間」の虚構性は承知しているつもりだが、いわゆる「聖地」を巡礼すると、「現実」と「虚構」が入り混じったような奇妙な感覚にとらわれるのは私

田中裕也

だけではあるまい。本書は古代から近代（現代も含む）の「ものがたりたち」のなかに描かれた「京都」を各章、各コラムの執筆者が紹介・分析している。ここでは近代以降の作品を扱った論考を中心に紹介していきたい。

村田裕和は都市論を補助線として、梶井基次郎「檸檬」に描かれる「京都」も丸善の商品同様に交換可能な記号に過ぎないとする。また「檸檬」の「私」の檸檬を爆弾と見立てる行為を〈遊戯〉と捉え、消費される「京都」から脱却する手段を本論の読者に提示する。

田中裕也は三島由紀夫『金閣寺』のなかに描かれた「京都」の歴史的重層性を指摘するとともに、また観光都市特有の〈見る〉／〈見られる〉という問題が不在の「金閣」の〈美〉というテーマを支えていると考察する。

池田啓悟は川端康成『古都』のなかに描かれた新旧織り交ぜた「京都らしさ」の内実を明らかにする。「伝統」や「モダン」な「京都」が描かれると同時に、太吉郎が〈朝鮮の女たち〉に対して「みやびな風情」を感じるというイロニーをも抱合していることを指摘する。

熊谷昭宏は森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』を、森見自身の「偽京都」という発言を参考に虚構の「京都」の境界線を考察する。具体的な固有名とともに、「路地」や「洛外」、そして「夜」を境界線として「見慣れない」「京都」を現出させる森見の手法を明らかに

する。

禧美智章は京アニの『けいおん』『たまこまーけっと』を取り上げ、「聖地巡礼」と「京都」の関係性を考察する。「聖地」となる「背景」の制作現場の実状とともに、アニメの「ものがたり」を読解するために、現実を参照した「背景」が重要であることを指摘する。

本書に共通する問題としては「京都らしさ」ということがあるだろう。「京都らしさ」には、現実とともに「ものがたりたち」が多分に含まれる。「京都らしさ」は、混沌・混乱かもしれないが、「京都」という都市は悠々とそれを着こなす。「ものがたりたち」から「京都」を考え直すのはいかがだろうか。（二〇一九年一〇月一二日 武蔵野書院 一五〇〇円＋税）

## ■書評

廣瀬陽一 著

### 『日本のなかの朝鮮 金達寿伝』

光石亜由美

本書は、金達寿についての、初めての本格的な評伝である。金達寿の執筆物だけではなく、関係者へのインタビュー、出生地である韓国の昌原市での調査などを通じて、金達寿の誕生から晩年までを描き出している。金達寿の生涯は、著者の区分によれば一九七〇年前後を境に、前半生が文学、後半生は古代日朝関係史に捧げられた。そして、文学

活動では、「在日朝鮮人文学」という文学ジャンルを確立し、古代史研究のジャンルでは「渡来人」という語の普及と定着に貢献したと評価する。

金達寿といえば小説では芥川賞候補作となった「玄界灘」と「朴達の裁判」が有名だが、本書はそうした文学者としての金達寿だけでなく、共産党、在日朝鮮人社会と関わった政治活動者としての金達寿、また、リアリズム研究会や現代文学研究会などの文学運動にかかわる行動者としての金達寿、そして、『日本のなかの朝鮮文化』『季刊三千里』という雑誌の創刊などにみられる朝鮮文化、在日朝鮮文化の発信者としての金達寿など多様な活動を詳述しながら、〈金達寿〉という活動体を描き出す。

「日本と朝鮮、日本人と朝鮮人との関係を人間的なものにする」という金達寿の生涯の目的を達成するためには、著者の言葉を借りれば、「ある特定の立場や観念が価値を持つ〈場〉を成立させている言説空間を根本的に問い直す」闘争が必要となる。それは、政治の場での闘争でもあり、文学の場での闘争でもあるのだが、最後に金達寿がたどり着いたのが古代日朝関係史という歴史の場での闘争というのは興味深い。本書の後半部分を占めているのは、古代日朝関係史を掘り下げることで、日本人の朝鮮認識を問い直す金達寿の姿である。

著者の廣瀬氏は本書を出版する前に金達寿の知的活動を追った『金達寿とその時代』（二〇一六年）を刊行している。評伝や伝記

は、人物の生涯を客観的に、時系列に描き出すものだが、その描き出しかたにも〈思想〉が必要であると思う。本書は前著『金達寿とその時代』で、帰化人史観への批判を通じて、日本の「朝鮮隠し」を問った金達寿の〈思想〉をベースに、両国、両民族の関係を「人間的」なものにしようとした金達寿の生涯の情熱や葛藤を余すところなく伝えている。

（二〇一九年一月三〇日 クレイン 二三〇〇円＋税）

林麗婷 著

### 『中日近代文学における留学生表象——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——』

劉娟

林麗婷氏著『中日近代文学における留学生表象』（副題省略）は、歴史の激変する二十世紀前半期に生き抜いてきた多様な留学生表象を、中日近代文学から探っている。本書は二部、六章の構造で、章ごとに主に一篇の小説を取上げている。

第一部は中国作家の筆による留学生像について考察している。第一章では、清末小説南武野蛮『新石頭記』を扱い、近代へタイムスリップして日本へ留学する賈宝玉の近代日本体験を中心に検討する。第二章において

は、一九二〇年代の留学生の貧困問題を掲げた張資平の小説『一班冗員的生活』を取り扱う。第三章では、崔万秋の『新路』を取上げ、作中に描かれた一九三〇年代の女子留学生に注目する。

一方、日本人作家が取上げた留学生像は第二部になる。第四章では、佐藤春夫の「アジアの子」を考察し、「佐藤の中国知識人・留学生に寄せた期待」と、現実とのズレを俎上に載せる。続いて第五章では、太宰治の『惜別』を取り扱い、アジア太平洋戦争以降の留学生政策・言説を踏まえ、小説の時代背景やその批評性を論じる。第六章においては、大

城立裕『朝、上海に立ちつくす』を扱っている。アジア太平洋戦争期に中国へ留学した沖縄の日本人青年の戦時体験という異なった視点を取る。風雲急を告げる時代に、中日両国の狭間に立ち尽くす日本人留学生のアイデンティティーの揺らぎを解剖する。

二十世紀前半期、新しい「文明」に憧れながら日本の土を踏んだ中国人留学生、および戦時中に「神聖」な使命を負いながら中国へ留学した日本人青年、彼等は「一衣帯水」の両国を行き来しながら、われわれにどのような中日交流史を語り続けてきたか。また、その中日交流の歴史に登場する留学生は、中日の作家の筆の下でどのように描かれつつ、さらにそれをいかに解読できるか。——本著は年代順に、以上の問をリアリステイックに解

読する。著者は中日近代文学に登場する留学生表象という未開拓の処女地に最初の鋏を入れ、中日比較文学・文化に新たな方向を示した。当該研究領域における今後のより多くの豊作が期待される。

(二〇一九年八月二〇日 日中言語文化出版社 二〇〇〇円＋税)

中田睦美 著

『芥川龍之介の文学と〈噂〉の女たち

——秀しげ子を中心に——

奥野久美子

秀しげ子といえば、芥川龍之介を苦しめた悪女として知られてきた。本書は、しげ子を二〇年以上にわたり研究してきた著者が、芥川研究の場を起点にしながらも、彼女の「〈噂〉のベール」を取り去ってその実像に迫ろうと積み重ねてきた成果である。本書に収録されてその中核をなす、著者の最初の論文題は「秀しげ子」のために」（副題略・一九九六年発表）であった。この言葉のとおり「とかく男性的な一方的まなざしで括られる〈噂〉の女たちの実像のほんの一部でも明らかにしたい」という思いで、本書は綴られている。

本書で示されている大きな成果は、これまではほぼ、芥川の愛人、としてしか知られていなかったしげ子の、歌人としての活動を丹念に追い、多くの歌や周辺資料を掘り起こし

たことである（本書第二部）。著者の意図は、そこからしげ子の〈実像〉をつかむことであり、歌人秀しげ子の再評価をめざすものではないのだろう。著者はしげ子の歌を「社会的に抑圧すべきほの暗い私の情念」と「伝統的な和歌の表現の粹」の「責めぎ合いの中からもう一步新しい表現の地平を獲得する、というところまでには至らなかった」と評する。

ただ、この評に説得力をもたせ、歌壇人としてのしげ子を論ずるには、拙評に先んずる鈴木暁世氏の本書評（『日本近代文学』第一〇二集）にも指摘があるように、やはり一首ごとの詳細な分析が必要であろう。さらにその上で彼女の歌に対する当時の評価が〈噂〉に惑わされない正鵠を射たものであったか否かも、知りたいところである。（蛇足ながら第三部「舞踏会」論の注番号が途中からずれているようだ。）

評者は、本書の「舞踏会」論にある「制作現場から大きく乖離した現代の性的規範をもつて百年前のテキストを裁断する読みや論評が果してどこまで適切なものか」という一節に注目し、そこに表れた、「制作現場」にこだわる研究方法に共感を持った。著者が秀しげ子の研究を続けてきたのも、「現代の性的規範をもつて」女性の立場からしげ子を擁護するためでは決してなく、当時の〈事実〉やしげ子の〈生の声〉をつかむためである。恩師に言われたという「事実」は長く残ると

いう言葉（あとがき）とも重なり、著者自ら〈愚直〉と繰り返す、奇を衒わぬ真直ぐな研究姿勢が表れている。

(二〇一九年七月二〇日 翰林書房 三八〇〇円＋税)

服部徹也 著

『はじまりの漱石『文学論』と初期創作の生成』

鳥井正晴

三部構成全一〇章の大著。第一部東京帝国大学文科大学英文学科という環境。第二部「文学論」講義と初期創作。第三部『文学論』成立後の諸相。多種の文献が博搜され、優れて実証的。各章詳細多岐な考察を、紹介自体も無理。『文学論』は、漱石の英国留学時の孤軍奮闘の営為。明治三七年一月『猫』（現第一章）を書いた時点でも、作家への意志はない。五〇年の生涯の三六年の「英文学者」としての漱石の全重量がある。

江藤淳は「文学論」の、最も重要な部分は私見によればその序文」。末次弘も『文学論』をそれ自体として内容に即しながら評価したものは存在しない。やっと平成二四年五、六月号「文学」が、「特集Ⅱ漱石『文学論』をひらく」、を組む。その『文学論』を、著者は全重量を懸けて対峙。「文学論序」に用いられたレトリックには注意。「刊本『文学論』の本文を絶対視するのは問題」。等閑

(なおざり)の『文学論』研究を一挙に逆転し、先覚的に推進する。

両講義を受講した金子健二は、八雲を「詩人」、漱石を「文学解剖教室の外科主任」と評した。

#### 文学論…形式論

若月保治(序論なし)

岸重次(序論断片あり)

森卷吉(序論あり)

金子健二(序論なし)

#### 文学論…内容論

森卷吉(第四編第二章の終わる寸前まで)

金子健二(第五編の終わりまで。補遺の暗示論や成功論なし)

中川芳太郎(第一編第二章の途中まで)

右は著者が確認できた「受講ノート記録箇所対応表」。漱石の言葉を使えば、ここに本著研究の「命根」がある。「講義草稿が現存せず」。秀才の誉れ高い中川が作成した草稿に「漱石が朱筆で加除訂正」、後半部は漱石が「書き下ろし原稿に差し替え」る。「五三〇カ所以上の訂正を要した『文学論』は漱石の怒り」を買う。「複数を比較することで一定水準までは漱石の講義内容を推定できる」。「金子健二のノートは(略)講義全体を含む唯一の受講ノートであるから、これを軸にして他のノートを比較できる」、つまり

Source Programの論理体系が。講義期は『吾輩は猫である』『坊っちゃん』の、加筆期は『二百十日』や『野分』の時期。作品から講義への往還も考察。注も詳細それ自体論に。「調査、解釈の余地が」「手沢本の所在は不明」「引用は筆者翻刻」などと附記、研究のスタンスは篤学的。

あとがきに「遅れてきた「テキスト論者」。著者はITに明るい時代の申し子、後進恐るべし。「今ほど漱石研究が面白い時代はない」。言語ゲームではない、漱石が語ろうとした声が聞こえる、『文学論』への確かな福音書。(二〇一九年九月 新曜社 四六〇〇円+税)

#### ■事務局だより

◆二〇一九年度支部報告ならびに二〇二〇年度支部活動につきまして、会員諸氏より承認をいただきましたことをご報告申し上げます。皆様、ご協力賜りありがとうございます。

◆二〇二一年度関西支部春季大会について中止になった二〇二〇年春季大会で予定されていた、同じ会場と企画で進めていきますが、今後、変更の可能性もございます。自由発表の公募も予定しております。

◆なお、春季大会中止のため、大会報告その他の記事を掲載することができませんでした。そのため、今回は、巻頭言のスペースを長めにとりました。御了解ください。

#### ◆献本のお祝い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍…支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先…関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

#### ■二〇二〇年度役員(新)は新規の委員

支部長…佐藤秀明

運営委員長…中田睦美

運営副委員長…磯部敦・光石亜由美

#### 〔会計・名簿〕

梶尾文武・深町博史・藤原崇雅

瀬崎圭二(新)

#### 〔会報〕

山本歩・松澤俊二・川畑和成

石原深予(新)・福田涼(新)

#### 〔広報〕

黒田俊太郎・廣瀬陽一(新)

#### 〔書記〕

村田好哉・荒井真理亜・開信介

西菌有利(新)

#### 〔企画〕

奥野久美子・白方佳果・長濱拓磨

斎藤佳子(新)・西尾元伸(新)

#### ■日本近代文学会関西支部事務局

〒五七七―八五〇二

東大阪市小若江三丁目四番一号

近畿大学 教職教育部 中田睦美研究室内